The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	パスカルとアルノーの幼児洗礼観 : 習慣と教育を中心に
Author(s)	川上, 紘史
Citation	Gallia. 2016, 55, p. 15-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61932
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

パスカルとアルノーの幼児洗礼観
―― 習慣と教育を中心に ――

川上　紘史

はじめに

ブレーズ・パスカルにとって、宗教的実践は信仰において大きな価値を持つ。

> キリスト教だけが、外部と内部が混ざり合っているので、万人に釣り合う。キリスト教は内的に人々を育て、外的に高慢な者をへりくだらせる。この両者がなくては、キリスト教は完全ではない。なぜなら、人々は文字の精神を理解せねばならず、学識ある者は彼らの精神を文字に従わせなくてはならないから[1]。

『パンセ』の「本性が堕落していることと他の宗教の誤り」と題された綴りの中の一断章からの引用である。パスカルは他の宗教よりもキリスト教が優れている根拠に、内的側面と外的側面、知的側面と実践的側面の融合を挙げている。この融合が、知的でない人々を内面的に成長させ、学識を鼻にかけた高慢な人々を外からへりくだらせるからだ。この時、宗教的実践はとりわけ学識ある者 habiles、高慢な者 superbes の持つ自己判断を優先させる傾向に対して矯正効果をもつものとして提示される。

こうした宗教的実践の重要性についてはすでに指摘されている[2]。だが、当時の宗教的実践観との比較研究は、少なくとも日本においては、ほとんど行われていない。しかし、パスカルがポール・ロワイヤルという 17 世紀フランスの宗教的に特異な集団と深い関係を結んでおり、その影響が無視できないことを考えるならば、隠士たちや修道院の思想とパスカルの思想を比較することは、彼の思想の独自性を明らかにする上で重要である。

パスカルとアントワーヌ・アルノー[3]の洗礼観を、とりわけ幼児洗礼を軸に比較検討することで、パスカルが宗教儀式に対し抱いていた考えの一端を明示することが本論の目的である。そのための手順として、まず、理想的なキリスト教徒ではない人を読者として想定している『キリスト教弁証論』、その遺稿集である

1）S252-L219.

2）山上浩嗣『パスカルと身体の生』, 大阪大学出版会 , 2014 年 , p. 33-66. Gérard Ferreyrolles, *Les Reines du monde. L'imagination et la coutume chez Pascal*, Honoré Champion, « Lumière Classique », Paris, 1995, p. 99-119.

3）Antoine Arnauld（1612-1694）. 神学者、哲学者。ポール・ロワイヤルの神学思想の支柱の一人。大アルノーとも呼ばれる。

『パンセ』において、洗礼が、習慣的に信仰を獲得させる儀式として有用なものとして描かれていることを確認する。ついで、同時代のキリスト教徒に向けて書かれた『初代と今日とのキリスト者の比較』という未完の小品を手がかりに、習慣的な信仰を獲得するものとしての洗礼に偏重することで起こる教育問題に対するパスカルの認識を確認する。最後に、アントワーヌ・アルノーが同時代のキリスト教徒に対して著した著作に基づいて、洗礼とその後の教育についてポール・ロワイヤルにどのような認識があったのかを確認する。

1.『パンセ』における洗礼と信仰

パスカルが athées と呼ばれる人たちや悪しきキリスト教徒に向けて書いたと言われている[4]『パンセ』において、洗礼という儀式と信仰の関係はどのように提示されているのか。『パンセ』中で洗礼 baptême の語は 3 回現れる[5]。宗教儀式の意味では 2 回用いられる。その一つは洗礼に基づく信仰の簡潔な定義である。

> 洗礼と共に受け入れられた信仰はキリスト教徒の、そして回心者のすべての生の源である[6]。

洗礼と同時に獲得した信仰によって、キリスト教徒としての生を送ることが可能となる、もしくはそうした信仰から発する、信仰に基づいた生き方がキリスト教徒のものであるといった意味であろう。だとすれば、洗礼とはキリスト教徒としての生を全うするための信仰を与える儀式である。では、洗礼と同時に獲得される信仰はどのようなものなのか。

> なぜなら間違えてはならないからだ。私たちは精神と同じくらい自動機械である。そして、そこから説得が行われる道具は論証だけではないことになる。論証されたことがどれほど少ないことか！ 証拠は精神を説き伏せるだけだ。習慣は私たちのもっとも強力かつ最も信じられている証拠をつくる。習慣は自動機械を傾ける。この自動機械が精神を知らぬ間に運んでゆく。明日が来るであろう、私たちは死ぬであろう、と誰が論証しただろうか？ これ以上に信じられていることがあるだろうか？ 故に、習慣は私たちにそのことを説得する。多くのキリスト教徒をつくったのは習慣である。トルコ人、異教徒、職人、兵士等をつくったのは習慣である。（異教徒よりもキリスト教徒に一層多く、洗礼において受け入れられた信仰がある）結局、ひとたび精神が真理のありかを目にしたなら、習慣に頼らなければならない。私たちからい

4）パスカルが想定した『パンセ』の読者像については以下の研究が有益である。Vincent Carraud, «Le dessein de Pascal : *De la vraie religion*, ou une apologétique de la douceur», in *Chroniques de Port-Royal*, No. 63, 2013, p. 45-66. Tetsuya Shiokawa, «Le péché originel dans l'apologie pascalienne : stratégie et enjeux», in *Ibid.*, p. 243-253.

5）「名づける」の意味の動詞 baptiser として 1 回（S532-L647）。宗教的儀式としての名詞 baptême が 2 回（S661-L821、S754-L925）。

6）S794-L925.

つも逃げ去るあの信で私たちを満たし、染め上げるために。なぜなら、いつも目の前にその証拠を持つことはあまりに問題があるからである。より簡単な信を獲得しなければならない。それは、暴力も、技術も、議論もなく、私たちに事物を信じさせ、私たちの全能力をその信へと傾け、そうして私たちの魂をその信へと落ち込ませる、習慣の信である。説き伏せの力によってしか信じておらず、自動機械が反対の事を信じるよう傾けているとき、十分ではない。私たちの二つの部分を信じさせねばならない。精神を人生において一度見たら十分な理由によって、そして、自動機械を、反対の方へ傾くことを可能としない習慣によって[7]。

この断章では習慣 coutume による信仰の必要性が説かれている。論証によって得られる信はいつも逃げ去る[8]。他方、習慣による信は逃げない。習慣は私たちの最も強力かつ最も信じられている証拠だからだ。その例としてパスカルは明日が来ること、死ぬこと、キリスト教徒、トルコ人、異教徒、職人、兵士であることを挙げる。キリスト教徒であることは国籍や職業と同じ、どのような環境、習慣の下に生れたかという偶然に基づく選択として描かれる。また、パスカルが挙げている例そのものに価値的判断は下されていない。パスカルがこの断章で示している習慣の力はニュートラルなもの、単に正しさを信じさせるものだ。

ところで、『パンセ』の手稿原稿では、引用文中の括弧内、洗礼についての記述がこれらの例の真横に書き込まれている。のちに加えられた例なのだ。この洗礼に関する追加の書き込みは、フェレロルによるパスカルの洗礼観解釈によると、洗礼という習慣に神による裏書という特権をパスカルが見出したことを意味する[9]。他の習慣は反復という性質により命題の真理性を確保している。その際、命題そのものの根拠は問題にならない。パスカルの例に即していえば、「キリスト教圏に生まれたからキリスト教徒となる」という命題の根拠は「いつもそうであること」、すなわち習慣であること以外にないのだ。これに対し洗礼はそれ自体神によって意味づけられた行為である。洗礼という意味のある行為によって産出されるキリスト教徒としての信は、単なる反復の結果としてのキリスト教徒の自己認識とは根拠の点で全く異なる。

とはいえ、習慣を主題とした断章への書き込みであるから、パスカルが洗礼によって得られる信を、自動機械すなわち身体に作用することで非キリスト教的生へと向かわせないものだと認識しているのは確かである。つまり、パスカルは根拠を有する点で特別な習慣として洗礼を提示しているのだ。

このように、『パンセ』において洗礼は人間を信仰へと向かわせる特別な習慣と

7）S661-L821.

8）「神の形而上学的な証明は人間の推論から極めてかけ離れ、実に込み入っているので、そうした証明はあまり印象深いものではないほどだ。そしてもしこうしたことが誰かの役に立つとしても、その証明を彼らが見ているその瞬間に限って役立つに過ぎない。そして、一時間後には彼らは間違ったのではないかと怖れる」S222-L190.

9）Ferreyrolles, *op. cit.*, p.99-100.

みなされる。しかし他方、パスカルは洗礼による信仰が問題を引き起こしているとも考えている。それを、『初代と今日とのキリスト者の比較』*Comparaison des anciens chrétiens avec ceux d'aujourd'hui* を通じて確認しよう。

2.『初代と今日とのキリスト者の比較』における洗礼と教育

『初代と今日とのキリスト者の比較』と題された未完の小品は、パスカルの洗礼観を知るうえで必要不可欠であるとともに、彼が同時代のキリスト教徒の問題点をはっきり表している点で重要な作品だ。本小品は 1657-58 年ころ、『パンセ』、『罪人の回心について』*Écrit sur la conversion du pécheur* とほぼ同時期に書かれたと推定されている[10)]。この作品については不明なところが多いが、キリスト教徒に対して書かれたのは確かだ。この作品でパスカルは、初代のキリスト教徒とパスカルと同時代のキリスト教徒を並置することで、後者が抱えている問題を浮き彫りにしようとしているからだ[11)]。冒頭からその意志ははっきりと表れている。

> 初代において、救済に必要なすべての点において完全に完成されたキリスト教徒しか見なかった。
>
> その代り今日あまりに粗野な無知しか見ないので、この無知が教会に対し愛情を抱いている人々すべてを呻かせるほどである。[...]
>
> 結局、かつて教会の内に受け入れられるためには現世から出なければならなかった。

10）1779 年に発見された本小品には情報がほぼない。そのため執筆年代は推定であり、論者によって差がある。レオン・ブランシュヴィックは年代未詳としている。Blaise Pascal, *Œuvres de Blaise Pascal*, publiées suivant l'ordre chronologique avec documents complémentaires, introductions et notes, par Léon Brunschvicg, Pierre Boutroux et Félix Gazier, 14 vol., Paris, Librairie Hachette et cie, « Les grands écrivains de la France », 1908-1914, tome X, p. 409. 1954 年のプレイアッド版の編者であるジャック・シュヴァリエは第二の回心後に執筆されたと推定している。Blaise Pascal, *Œuvres complètes*, texte établi et annoté par Jacques Chevalier, Gallimard, « Bibliothèque Pléiade », 1954, p. 555. ルイ・ラフュマは 1655 年から 1657 年の間だと考えている。Blaise Pascal, *Œuvres complètes*, préface d'Henri Gouhier de l'institut, présentation et notes de Louis Lafuma, Paris, Seuil, 1963, p. 360. 2000 年のプレイアッド版の編者であるミシェル・ル・ゲルンは仮説にすぎないと留保しつつ 1655 年と主張している。Blaise Pascal, *Œuvres complètes*, Édition présentée, établie et annotée par Michel le Guern, 2 vol., Gallimard, « Bibliothèque Pléiade », 1998-2000, tome II, p.1168.（以下 *LG* と略記）本論ではジャン・メナール、フィリップ・セリエ両名の見解を容れて 1657-58 年ころに執筆されたとする。*ŒC*, t. IV, p.52. Blaise Pascal, *Les Provinciales, Pensées et obscules divers*, textes édités par G. Ferreyrolles et Ph. Sellier, Paris, Librairie Générale Française, « La Pochotèque », 2004, p.31.

11）メナールは『初代と今日のキリスト者の比較』とアントワーヌ・アルノーの著作における「原始教会」l'Église primitive 精神への回帰の傾向の共有を指摘している。*ŒC*, t. IV, p.52. 大アルノーは 1643 年に出版した主著『頻繁なる聖体拝領』の序文においてデュペロン枢機卿の言葉を引いて「原始教会」について語っている。だが、デュペロン枢機卿にとって最初の四つの普遍公会議の行われた時期である 325-421 年を指していたこの用語は、アルノーによってバシレイオス、クリュゾストモス、アウグスティヌスが活躍した期間、すなわち 360-430 年頃を指すものとなる。*ARN*, t. 27, p.125-126. Voir Hervé Savon, « L'Arguement patristique dans la querelle de *La Fréquente Communion* », in *Chroniques de Port-Royal*, No. 44, 1995, p.84-85. とはいえ、パスカル自身はアウグスティヌスの提示したキリスト者像を念頭に置いているように思える。ル・ゲルンは洗礼を受ける成人についてのパスカルの記述とアウグスティヌスの『信仰と行為』の中に見られる記述をひきつけて考えている。*LG,* p.1168-1170.

その代り、今日現世に入ると同時に教会に入っている[12]。

初代のキリスト教徒は完成されている consommés のに対し、現代のキリスト教徒は無知 ignorance の内にある。つまり、初代のキリスト教徒は精神的にも実践的にもキリスト教徒として完全であったが、現代のキリスト教徒は精神的な条件を全く満たしていない、と対比的に示されているのだ。この差の原因が最後の二文で示される。教会に受け入れられる、すなわち洗礼を受けるためには現世からの離脱が必要とされていた。しかし今では現世に生まれるとともに洗礼を受ける。洗礼を受ける際の現世との関係の変化がキリスト教徒の無知を生じさせる。

ここで同時代のキリスト教徒の問題を提示するに当たって、パスカルは歴史的視点を採用する。初代のキリスト教徒という模範的な過去の存在を対置することで、問題の現在性を強く意識させるとともに、現代のキリスト教徒の悲惨な状態がより印象的に示される。表面的には、かつてと今との洗礼の習慣の変化が悲惨な状態の原因であるかのように見える。だがこの変化、成人への洗礼 baptême d'un homme parfait から幼児洗礼 baptême des enfants への変化は原罪論の観点から必要不可欠なものである。

しかし、極めて有用な規律の変化に続いた不幸を教会のせいにするべきではない。なぜなら、教会は振る舞いを変えたとはいえ、精神を変えてはいないからだ。だから、洗礼の延期が多くの子供たちをアダムの呪いのうちに残しているのを見た教会は子供たちをこの多くの滅びから解放するのを望み、教会が彼らに与える救いを早めているのだ。そして、この良き母はこの上ない後悔と共に、教会が子供たちの救済のためにもたらしたものが成人の喪失の機会となっているのを見ている。

教会の真の精神はきわめて弱い年齢において現世の汚染から引き出したものたちが現世のものとは全く違う認識をつかむことである。教会は、堕落した理性が彼らをつれてゆく悪徳に先んじるために、理性の使用に先んじる。そして、彼らの精神が動き出す前に、教会は教会の精神で彼らを満たす、彼らが現世への無知と彼らが現世を決して知らないだけに一層悪徳からかけ離れた状態において生きるように[13]。

アウグスティヌス以来の伝統的幼児洗礼論[14]に則って幼児洗礼の必要性が主張さ

12）*ŒC*, t. IV, p. 54.
13）*ŒC*, t. IV, p. 56-57.
14）幼児洗礼は「習慣」として2世紀ころにはすでに成立していた。しかし、「罪の赦し」の意味をもつものと使徒時代から解されていた洗礼が自罪のない幼児に行われる場合、「罪の赦し」とはどういう意味を持つのかが明確ではなかったため、幼児洗礼は議論の対象とされていた。ペラギウス派との論争の中でアウグスティヌスが幼児洗礼の必要性を基礎づける「原罪の神学」を形成する。その内容は次の通りである。人類の始祖アダムの犯した自罪である原罪は万人に遺伝され、引き継がれている。これは自ら行う罪すなわち自罪とは異なるため、原罪自体によって地獄に落ちることはない。しかし罪ではあるため、原罪から解放されなければ天国へ行くことはかなわない。ゆえに、洗礼にあずからずに死んだ幼児は天国へも地獄

れている。ここで注目すべきは、幼児洗礼が悪の回避の観点から有益だとする点だ。幼児期に洗礼を受けることで、子供の内に現世から離れることができる。理性が人間を堕落へと向かわせることが妨げられる。現世を知らないことによって悪徳をも知らずにいることが可能となるというのだ。こうした悪徳の回避の観点は『パンセ』において洗礼を扱った箇所には見られない。

さて、パスカルは精神の活動する以前の子供を教会の精神で満たすことを、教会の狙いの一つとする。教会は、洗礼後幼児にキリスト教教育を施すことを求めているのだ。しかし、実際に信者の間では教会に望まれた教育は行われていない。

> 教育が洗礼に先立っていた時、万人が学んでいた。
>
> しかし、洗礼が教育に先立つ今、秘跡のために必要な教育は意志的なものとなり、次いでなおざりにされ、ついには殆ど廃止された。
>
> このふるまいの真の理由は、人が洗礼の必要については説得されたが、教育の必要については説得されなかったからである。そういうわけで、教育が洗礼に先立っていた時、一方の必要性が、他方に必然的に助けを求めることをなしていた。
>
> 代わりに、今日では、あたかも学ばずにキリスト教徒となったかのように、洗礼が教育に先立つので、学ぶ事なしに、キリスト教徒であり続け得ると信じられている[15]。

本来、洗礼と教育は密接な関係にある。初代教会の洗礼において洗礼志願者は洗礼を受ける前に宗教の神秘についての教育、それまでの人生の痛悔、信仰の偉大さ、卓越性の認識、心の回心、洗礼への意欲[16]を持たねばならないからだ。しかしながら、洗礼が教育の前に行われることによって、教育の必要性は無視された。教育が無視される過程を、意志的、なおざり、廃止の三段階で描くことで、洗礼後の教育の問題が時を経るに連れて度合いを増していったこと、そしてパスカルの時代にもっとも重篤な状態にあることが示されている。パスカルがこの問題を現在の問題であると捉えていたことが窺われる[17]。

教育が廃止された理由は重要である。パスカルはそこに、人々が教育の必要性を説得 persuader されなかったことを挙げている。先に見たように、教育は教会の意志、神の意志であるとパスカルが考えていたのは確かだ。つまり、人々は教

へも行けず、孩所におかれる。幼くして死んだ幼児が神の下へ向かうために、幼児洗礼は必要なのだ。この「原罪の神学」は、パスカル、大アルノーがともに強く影響された、トリエント公会議において確認され、以降その権威は絶大なものとなる。以上、宮川俊行「幼児洗礼と罪の赦し」『純心女子短期大学紀要』No.31, 1994, p. 2 を参考にした。また、以下の論文も参考になる。石橋泰助「洗礼の秘跡を受けずに死去した幼児に対する見解」『南山神学』No. 31, 2008, p. 99-115. 中澤實朗「洗礼論の歴史的展開」『弘前学院大学文学部紀要』No. 46, 2010, p. 1-51.

15）*ŒC*, t. IV, p. 59.

16）*ŒC*, t. IV, p. 59.

17）パスカルの生きていた当時、宗教界で初代の教会と当代の教会どちらがよりよいかを巡った論争が起こっていた。Hervé Savon, art. cit., p. 83-92.

会すなわち神のいうことを聞き入れなかった、納得しなかったのだ。また、説得するという言葉を用いていることから、現代のキリスト教徒は力でもって、論証でもって教会の意志に従わせようとされたわけではなく、納得という形での理解を求められたとパスカルは考えている[18]。にもかかわらず従わないということからは、神の意志をないがしろにすることが帰結する。このようにパスカルは教育がなされないことそのものを問題にしている。パスカルが洗礼と教育の関係の中に見出す問題は、神の意志に対する人間の無理解、無視なのだ。

以上をまとめると次のように言える。パスカルにおいて、洗礼と教育の関係は、歴史的視点を用いて神の意志の下に提示される。にもかかわらず教育がなおざりにされている現実に、パスカルは神の意志に対する無視という罪を看取する。この罪は、洗礼のみで自らがキリスト教徒たるにふさわしいと判断するところに由来する。この罪は『パンセ』でパスカルが示した習慣の有効性と裏表の関係にある。つまり習慣的な信仰、ルーチンとしての信仰に堕しかねない洗礼認識が批判されているのだ。

以上見てきたパスカルの洗礼観の独自性を浮き彫りにするために、最後にポール・ロワイヤルの宗教思想、理論の支柱の一人であるアントワーヌ・アルノーの洗礼観を比較対象として見てゆこう。

3. アルノーにおける洗礼と教育

まず、アルノーが幼児洗礼の状況をどう理解しているかを確認したい。

> 当代の堕落において嘆くべきものがあるなら、それは子供たちの育て方である。洗礼において子供たちをイエス・キリストにささげた後、子供たちに悪魔と、悪魔がその君主である現世を放棄させた後、人々が子供たちを育てているさまは、まるで現世と悪魔に子供たちをささげたかのようだ。子供たちに神の事柄について教育することにも、子供たちの一層未熟な時期から神への畏敬を与えることにも少しも気を使わない[19]。

アルノーが1650年に書いた『教会の聖教父、イエス・キリストの恩寵の守護者のための弁明』*Apologie pour les saints Pères de l'Église, Défendeurs de la Grâce de Jesus Christ etc.*[20] という著作の「実に若くして洗礼の無垢を失う人々について」と題された章の冒頭からの引用である。アルノーは洗礼を受けたことによって期待される教育がなされていない現状を告発している。捧げた consacrés という言葉をイエス＝キリストと悪魔および現世という対極に位置する存在を対象に用いること

18）説得の問題についても以下の論文は有益である。Vincent Carraud, art.cit..
19）*ARN*, t. 23, p. 901.
20）«*etc.*» は «*Contre les erreurs qui leur sont imposées Dans la Traduction du Traité de la Vocation des Gentils, attribué à S. Prosper, et dans les Réflexion du Traducteur ; Dans le Livre de M. Morel, Docteur de Sorbonne, intitulé : Les véritables Sentiments de S. Augustin et de l'Église, Et dans les Écrits de M. le Moine, Docteur de Sorbonne, et Professeur en Théologie, dictés en 1647 et 1650*»。

で、洗礼を受けた以上本来あるべき状態と実際の状態の落差が明確に描き出されている。同時に本来あるべき状態を達成するためには洗礼後の教育が必要であると前提されているようにも思われる。

この教育の問題が当代の堕落 corruption du siècle であるという認識は重要だ。アルノーは、パスカル同様、洗礼後の教育の問題をきわめて同時代的な問題であると考えていたのだ。では、教育の欠如がどのような問題を引き起こしているとアルノーは考えているのか。

> 洗礼の恩寵を知る前に、洗礼の恩寵を失う子供がどれほどいることか、誘惑に抵抗するために神の救いを懇請しなければならないというもっとも簡単な考えを持つ前に、子供たちを罪へと突き落す誘惑者たちに出会う子供がどれほどいることか、模倣によってか習慣によってでなければ、もしくはたかだか神に返すある種の尊敬として祈りをみなすことでしか、子供たちが神へ祈るとは何なのかを知らないとき、神が子供らを精神のうちに入れたこともなく、何らかの悪を犯すように導かれていると感じるたびに、人間の救い主に恩寵を求めるためには、人間の救い主へと訴えかけねばならないということもなしに、悪しき模範と本性の堕落へ身をゆだねる子供がどれほどいることか[21]。

神についての教育がなされていない子供が陥った状態をアルノーはこの引用の中で述べている。恩寵の喪失、誘惑者の発見、堕落の三つの状態が挙げられている。これら三つの状態は「知る以前に」という限定とともに語られる。

ポイントは、アルノーは教育の欠如に由来する無知が子供たちの悪への傾倒を野放しにしてしまうと考えている点にある。ジャンセニスムでは、原罪によって本性が堕落し、現世的なもの、作られたものへと執着するように人間は変質しているとみなされる[22]。つまり、人間は必然的に悪へと向かう。それを避けるために祈りが必要だが、教育を受けていない人間は祈りの意味が分かっていないから、祈りを有効なものとして実行できず、人は堕落する。その堕落を止めるものとして教育がある。アルノーは人間が生きる中で悪、現世への傾倒に抵抗するための前提として教育が必要だと考えているのだ。ここから、教育の欠如を罪の間接的な原因であるとアルノーは考えていると言える。パスカルの指摘するような教育の欠如そのものを神にそむく罪であるとする視点はここにはない。

ところで、アルノーは別の著作において、キリスト教教育は現世では難しいという考えを示している。

> 子供たちが現世において自分の義務について学びうるというのは非常に困難なことである。なぜなら、理性を持たず、もしくは理性が非常に弱い子供た

21）*ARN*, t. 23, p. 901-902.
22）Voir S182-L149.

ちは、言われていることをほとんど理解できないけれども、やっているのを彼らが見たどんなものでもたやすく適応するからだ。故に、常に彼らの前にある罪や人々の異教的な振る舞い方は気づかぬうちに子供らの素行のうちに至り、子供たちの魂はそれに全面的に一致してしまう[23]。

1665年に書かれた『ポール・ロワイヤルの修道女たちのための弁明』*Apologie pour les religieuses de Port-Royal, contre les injustices et violences du procédé dont on a usé envers ce Monastère* と題された作品からの引用である。この作品はポール・ロワイヤルの修道女たちが受けたいわれのない中傷を反駁するためにポール・ロワイヤルの有力者たちが作り上げたものだといわれる。ここに引用した文章は、修道女たちの教育への従事は教会に対する奉仕そのものであるという主張に続くものである。

俗世におけるキリスト教教育が困難である理由としてアルノーは理性の弱い子供という存在はキリスト教の教えを理解しないのに対し、現世に蔓延する罪や異教的振る舞いは子供の素行 mœurs[24] へ影響を及ぼすことを挙げている。この時、理性と身体を対立させて描いていることに注目しなくてはならない。パスカルが習慣論において精神と自動機械と分けて考えたのと同様に、アルノーも理性と身体を分けて考えているのだ。アルノーはこの対立を同時に善悪の対立としても示す。キリスト教的教育が理性に割り当てられ、子供が罪を犯すように向かわせる罪や振る舞いが身体的行為に割り当てられていることからこの対立は容易に理解される。理性＝善、身体行為＝悪という図式を、アルノーは次の引用に見られるような事実認識から引き出している。

そうしようと思うことはめったにないことであるとはいえ、福音書の何らかの箴言で子供たちの記憶を満たしうるというのは本当である。しかし、もし、それらの真理がそれらの実践を見ることでそれらを感知できるようになっていないならば、それらの真理は全く肉的な心に入るためにはあまりに霊的過ぎる。また、反対に、悪徳は粗野で私たちの情念に一致しており、その模範が私たちには全く欠けていないので、どんなに私たちが若くとも、私たちは労せず悪徳を学び、私たちが常に共に生きる、乱れた、同時代の精神で満ちている人と似たものになるために、訓練も学習も必要ないのだ[25]。

人間の肉的な心がキリスト教の真理を知る、もしくは悪徳を理解するために、実践されている様を見ることが必要である。しかし、宗教的真理を実践している人は現世にはほとんどいない。あまりに霊的過ぎる真理は弱い理性にはほとんど理

23）*ARN*, t. 23, p. 191.
24）フュルティエール『万能辞典』は mœurs を習慣によって形成されるエートスと定義している。Antoine Furetière, *Dictionnaire universel*（1690）, Genève, Slatkine Reprints, 1970, 3 vol., art. «mœurs»
25）*ARN*, t. 23, p. 191

解できない。これに対し、罪の実践は非常に多く見られるから訓練も学習もなしに習慣的に魂を罪に一致させる。先に見た精神的キリスト教教育と罪の習慣の対立は模範となる実践のあるなしに起因しているのだ。規範となる実践の存在により、心の中に真理、悪徳が侵入するという考え方は、パスカルがいう行為の反復、すなわち習慣が人を強力に説得するという考えに非常に近いのは明白である。しかし、パスカル、アルノー両者が目指すものは全く異なっている。パスカルが反復による説得という習慣の力そのものを取り上げるのに対し、アルノーは悪の行為が現世に蔓延しているという事実から、習慣をあたかも悪への導き手のように描き出している。

まとめ

本論は洗礼という宗教儀式に対して、後のキリスト教的生との関連の中でパスカルとアルノーが持つ認識を比較することで、パスカルの宗教儀式に対する認識の一端を明らかにすることを目的とした。

パスカルもアルノーも、洗礼によってその後の人生がキリスト教的に正しいものとなることが義務付けられ、その実現のために人間の側からの行為が必要であると考えている点は共通している。

アルノーは教育の必要性を主張している。俗世に蔓延する悪しき習慣による子どもたちの堕落、それによって犯される罪、これを避けるために教育が必要であるからだ。教育の欠如は悪の原因として描かれ、欠如そのものが問われてはいない。また、習慣は子どもを悪へと誘う危険なものであるとして提示される。

これに対しパスカルは教育の必要性を神学的、歴史的観点から主張する。これによって洗礼という儀式と教育の関係は教会の意思という領域で語られることとなる。その結果、洗礼に基づく習慣的信の偏重によって引き起こされる教育の欠如そのものが神への反逆と指摘されるに至る。

しかし、パスカルは習慣その力そのものを否定しない。『パンセ』において洗礼によって獲得される習慣的信は特権的かつ必要なものとして提示される。習慣を悪への道であるかのように提示するアルノーとは違い、パスカルは習慣の力がニュートラルかつ必要なものであると理解していたのだ。

（大阪大学大学院博士後期課程在学中）

引用凡例

Blaise Pascal, *Œuvres complètes*, tome I-IV, éd. J. Mesnard, Paris, Desclée de Brouwer, 1964-1992.（記号 *ŒC*）

—*Les Provinciales, Pensées et obscules divers*, textes édités par G. Ferreyrolles et Ph. Sellier, Paris Librairie Générale Française, « La Pochotèque », 2004.『パンセ』からの引用はこのテクストに従う。なお、出典箇所はセリエ版、ラフュマ版の断章番号をそれぞれ記号 S、L に続けて示す。

Antoine Arnauld, *Œuvres de messire Antoine Arnauld, Docteur de la Maison et Société de Sorbonne*, Lausanne, 43 vol., in-4°, 1775 à 1781 : rpt. Culture et Civilisation, Bruxelles, 1964-1967.（記号 *ARN*、なお巻数は記号の後アラビア数字で示す）